

きゅうむらかわべっそう

旧村川別荘

手賀沼のほとりに花開く
大正から昭和の別荘空間

我孫子市教育委員会



大正末の手賀沼



旧村川別荘の歴史

今からおよそ百年前、手賀沼
を愛した帝大教授がいた。

その名は村川堅固

息子の堅太郎に受け継がれた
別荘は、

平成になって取り壊され
る運命にあった。



江戸の道から植えた母屋



手賀沼に遊ぶ村川堅固の孫

別荘の重要さに気がついた
遺族と市民、行政によって
別荘は守られた。

さあ、これから手賀沼のほとりに花開いた
大正から昭和の別荘空間にご案内します。

(写真はいずれも村川家のアルバムより)

村川堅固と村川堅太郎

～親子二代にわたる西洋古代史学者

村川堅固は明治8（1875）年、熊本に生まれました。幼少より勉学に優れ、熊本にあった第五高等学校を経て、明治31（1898）年に東京帝国大学文学部



村川堅固

史学科を卒業しました。欧州留学を経て、明治45＝大正元（1912）年には東京帝国大学教授になり、西洋古代史を担当して学生を指導しました。昭和10（1935）年、大学を定年退官して名誉教授に就任、戦後間もない昭和21（1946）年に逝去しました。

村川堅太郎は明治40（1907）年東京生まれ。昭和3（1928）年には東京帝国大学に入学、父親と同じ西洋古代史



村川堅太郎

を志します。昭和22（1947）年には東京帝国大学教授（この年、東京大学と改称）になりました。ギリシャ・ローマ研究では国際的に注目を浴びる論文を書いたほか、研究旅行の体験から書いた『地中海からの手紙』は昭和34（1959）年の第7回エッセイストクラブ賞を受賞し、お堅い研究者ではない一面ものぞかせています。また山川出版社刊の「高校世界史教科書」は多くの高校で採用されました。昭和43（1968）年、東大を定年退官

して名誉教授となり、日本学士院会員として活躍した後、平成3（1991）年逝去しました。



旧村川別荘建物配置図

村川堅固・堅太郎の交友

堅固が第五高等学校に入った頃、校長として赴任したのが嘉納治五郎（教育者・柔道の「講道館」創設者）でした。嘉納から「巴投げ」を習ったという逸話があり、大学卒業後も一時期秘書を務めるなど、終生変わらぬ師弟関係を結びました。堅固が我孫子に別荘を設けたのも嘉納の影響があったからだといわれています。堅固は趣味の釣りを通じて我孫子の景観を愛していましたが、昭和初期に起こった手賀沼干拓計画に対し、ジャーナリスト杉村楚人冠（緑に在住）、嘉納治五郎らと共に環境保全を訴えました（「手賀沼保勝会」）。また、堅太郎は我孫子在住の郷土史家、小藤勝夫や東京大学教授で東洋史学の大家、西嶋定生（白山に居住）と親交を結びました（敬称略）。



嘉納治五郎



杉村楚人冠

旧村川別荘の建物

堅固は明治43（1910）年、東京市小石川区雑司が谷（現：文京区目白台）に自宅を構え、大正6（1917）年、我孫子に別荘用地を購入しました。当時の我孫子は東京から1時間の別荘地として知られ、別荘下の道（ハケの道）を挟んで水田と葦原、美しい手賀沼、冬には富士山が望める景勝の地でした。大正10（1921）年に、別荘に行く道（子之神道）付近にあった我孫子宿本陣離れ（郵便ステーション）を解体移築して「母屋」としました。大正14（1925）年には、



母屋（もどまや）



秋には紅葉も美しい庭



鳥形の門撞し



母屋牌額

←「天箭」は「テン
ジョウ」と読みま
す。「ジョウ」とは
竹で作った箭のこ
とです。

朝鮮半島^{ヒョンナム}平穰郊外で東京帝国大学文学部が行っていた古墳の発掘調査視察に赴いています。昭和2～3（1927～28）年にかけて作った新館は朝鮮視察によって得た建物の印象をもとに作ったとされています。建物土台は大正12（1923）年の関東大震災の経験を活かした、鉄筋コンクリート造り。床は寄木^{よきぎ}作りで、沼側にしつらえた部屋は沼を見渡せるよう、大きくガラス窓をとっています。奥にあるのは寢室兼書齋で、灰色のねすみ漆喰壁を配し、ベッドとデスクを配置しました。母屋は江戸の香りを残す伝統の世界、新館は鉄筋コンクリートという合理性の上に、東洋と西洋が絶妙なバランスを保つ世界といえます。建築が建てた人の思想や感性を表すのであれば、明治・大正から昭和という大きな変化の時代に生きた、学者村川堅固の世界観を知る上で極めて重要だといえます。



新館



手勢沼の眺望を意図したガラス窓

旧村川別荘の道具類

新館にある「三本足の椅子」は我孫子に住んでいた柳 宗悦やなぎ ねがひ（民藝運動提唱者）の居宅（三柳荘＝緑1丁目）に大正5（1916）年、滞在していた英国人陶芸家バーナード・リーチがデザインして我孫子の名大工、佐藤鳴蔵さとうなるぞうが作った椅子です。リーチの家具は、益子参考館（濱田庄司旧宅はまのむねぢい＝民藝運動の陶芸家）や、志賀直哉しげ なお郎（緑2丁目）の古写真等で確認されるのみです。この椅子がどこからもたらされたものかは分かりませんが、白樺派の人々が住んでいた我孫子らしい逸品です。



床の間に飾られている「夜学」と題される掛け軸は村川堅固むらがわ けんこうの妻方の通縁に当たる、国学者中島廣足なかじま ひろあし（1792～1864）が勉学に臨む姿勢を詠んだ歌「みな人を寝よとの鐘は 文机に わが打ち向かう 始めなりけり」です。



新館内に残る灯籠とうろうは、昭和はじめまでこのあたりは電気が通じておらず夜になると漆黒の闇しっこくになって往復することもままならなくなるため、生活空間である母屋と寝室・書斎・居間である新館とを結んだあたりにありました。（道具類は貸し出しや保存のため展示されていない場合がございます）



旧村川別荘市民ガイド

旧村川別荘の開館時間は、午前9時から午後4時までです。（月曜と年末年始休館、月祝は開館、翌平日休館）。
上記時間に市民のボランティアによる現地ガイドを行っています。ぜひ、お声かけください。
多人数での見学は、事前に我孫子市教育委員会文化・スポーツ課（04-7185-1583）までご連絡ください。



旧村川別荘には駐車場はありません。JR我孫子駅南口から市役所経由東我孫子車庫・
 湖北駅南口・布佐駅南口行きバスで約10分「市役所前」バス停下車、徒歩5分。
 または我孫子駅南口より徒歩25分。

編集発行：我孫子市教育委員会文化・スポーツ課
 住 所：我孫子市我孫子1684番地
 電 話：04-7185-1583
 発行年月日：平成25年10月

(不詳無断転載)